



Title	第2章 アイヌ民族の階層形成
Author(s)	野崎, 剛毅
Citation	「調査と社会理論」研究報告書, 31, 33-41
Issue Date	2014-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54988
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN00075302_31_04_12.pdf



第2章 アイヌ民族の階層形成

野崎 剛毅 | 札幌国際大学短期大学部准教授

第1節 分析の視角

本章では、伊達市で行ったアイヌの人々への聞き取り調査をもとに、アイヌの人々がどのようにして階層を形成していくのかを検討する。

アイヌ民族の階層形成過程については、すでに札幌市、むかわ町（野崎 2012）、新ひだか町（野崎 2013）で行われた同様の調査をもとに分析を試みている。その際には、対象者を年齢階層（青年層、壮年層、老年層）と性別で6つのカテゴリーにわけ、それぞれ別個に働く階層形成の論理を探ろうとした。

その結果、札幌市およびむかわ町調査では、青年層が男女を問わずきわめて厳しい生活環境に置かれていること、男性壮年層、老年層においては本人の学歴が到達階層に影響を与えるという学歴社会の原理が機能している一方で青年層ではそのような傾向が薄いこと、女性においては出身階層や本人の学歴等のほぼすべての要素が「だれと結婚したか」という1つのファクターの前に無効化していることなどの知見が得られた。

新ひだか調査においても、女性における結婚というイベントの重要性は札幌・むかわ調査同様に確認された。ただ、青年層の生活環境の悪さについては、壮年層、老年層の収入も低いため、相対的にみて、札幌・むかわほど目立たないものになっていた。また、学歴の効用については壮年層において確認されたものの、老年層においてはほぼなくなっていた。新ひだか町全体の特徴として、職業上、経済上の成功者がほとんど見出されず、階層の分化が札幌、むかわほど進んでいない。このことが、階層形成に対する様々な要素の影響力を弱めていると考えられる。

本章においては、これら先行調査で得られた知見を参考として、伊達市における階層形成のメカニズムを探っていく。以下の要素が検討課題としてあげられる。

- ① 階層形成に学歴はどのような影響を与えているのだろうか。学歴を獲得することによって階層の上昇移動をすることは可能だろうか。
- ② 女性の階層形成において、結婚以外に重要な要因はあるのだろうか。

また、本章ではアイヌの血筋にも注目をしたい。すなわち、

- ③ アイヌの血筋の違いは到達階層に影響を与えるのだろうか。

ということである。これらを通じて、伊達市におけるアイヌの人々の階層形成過程の特徴を明らかにしたい。

本章で利用するデータは以下のとおりである。2013年8月に伊達市で行ったアイヌの人々への聞き取り調査データ47ケースを対象とする。対象者の基本属性を表2－1に示した。本調査の大きな特徴として、女性の対象者が多く男性が少ないという点があげられる。また、青年層が男性4人、女性5人の計9人しかいない。男性の平均年齢は52.5歳、女性は52.8歳である。最も若いのは男性で21歳、女性で20歳、最高齢は男性で82歳、女性で76歳（2人）であった。

表2－1 対象者の内訳		単位：人	
	男性	女性	計
青年層（～39歳）	4	5	9
壮年層（40～59歳）	4	16	20
老年層（60歳以上）	7	11	18
計	15	32	47

分析では到達階層として現在の職業、個人年収、世帯年収に注目をする。表2－2は現在の職業をまとめたものである。表を見やすくするため、度数が0のセルは数字をいれず空欄としている。男性では建設・採掘業が5人と最も多く、次いで農林漁業が4人、無職が4人、生産工程従事者と輸送業がそれぞれ1人ずつであった。無職はすべて老年層である。男性は働いている全員が第一次産業か第二次産業に従事しており、第三次産業に関わっている者はいなかった。女性ではどの年齢層でも無職（専業主婦を含む）が最も多い。無職を除くと、農林漁業が8人、サービス業が4人、専門・技術職が3人、運搬・清掃業が2人、事務と生産工程従事者がそれぞれ1人であった。なお、農林漁業の多くは家業である漁業の手伝いである。また、専門・技術のうち2人は看護関係である。

個人年収と世帯年収は表2－3のとおりである。なお、本調査では個人・世帯年収を100万円刻みのカテゴリで聞いている。以下の分析において平均年収を示す際には、100万円未満には50万円を、100万円～200万円未満には150万円をというように、各レンジの中央値を代表値として計算をしている。

個人年収について、まず特徴的なのは壮年層男性の個人平均年収の高さである。しかし、これは漁業で個人年収が1,000万円を超えているという1人に大きな影響を受けており、あまり信用できる平均値とはいえない。壮年層男性は平均個人年収が高いのではなく、分散が大きいと見るべきであろう。青年層男性個人の平均は200.0万円、老年層は142.9万円、男性全体では280.0万円であった。

女性では200万円未満が多く、青年層は5人全員が、壮年層でも12人が年収200万円未満となっている。男性と比較してもその平均は明らかに低く、青年層が80.0万円、壮年層が128.2万円、老年層が72.2万円、女性全体では103.3万円であった。なお、女性で最も年収が高い者の職業は看護師、次に高い者は調理師であった。

世帯年収は全体的に高く、男性で478.6万円、女性で450.0万円であった。ただ、世帯年収は不明が多いため、とくに男性においては参考程度と考えた方がよい。不明を除いた世帯年収のそれぞれのカテゴリにおける最頻値は、青年女性が300～400万円、壮年男性が300～400万円と600～700万円、壮年女性が200～300万円、老年男性が100万円未満であった。老年女性は分散

が大きく、配偶者がまだ働いているかどうか、子ども世代と同居しているかどうかによって差が大きくなっている。

表頭の右に、本調査と同時におこなわれた伊達市民調査における伊達市民の平均年収を示した。アイヌ調査のサンプル数が小さいので単純な比較はできないが、参考とすることはできるだろう。個人年収を比較すると、壮年層男性でアイヌの数字が大きくなっている他は、市民平均の3分の2から、半分以下の水準となっていることがわかる。

表2-2 現在の職業

単位：人

		専門・技術	事務	サービス	農林漁業	生産工程	機械運転・輸送	建設・採掘	運搬・清掃	（無職・専業主婦）	不明	計
青年	男性				2			2				4
	女性	1			2					2		5
壮年	男性	1	1	4	2	1	1	1	2	4		4
	女性				3							16
老年	男性					1		2		4		7
	女性	1			3					6	1	11
計	男性				4	1	1	5		4		15
	女性	3	1	4	8	1			2	12	1	32

表2-3 個人年収、世帯年収

単位：人、万円

			なし	＜100万円未満	＜200万円未満	＜300万円未満	＜400万円未満	＜500万円未満	＜600万円未満	＜700万円未満	＜800万円未満	800万円以上	不明	合計	平均（万円）	伊達調査
個人年収	青年	男女	1	2	2	1		1						4	200.0	298.3
														5	80.0	224.2
	壮年	男女	1	7	4	1	1	1		1		1	1	4	600.0	511.0
														16	128.2	231.5
	老年	男女	1	3	1		2						7	7	142.9	280.6
													2	11	72.2	171.7
世帯年収	計	男女	1	5	1	2	2	2		1		1		15	280.0	361.7
			2	16	8	1	1	1					3	32	103.3	200.0
	青年	男女				1						1	2	4	900.0	523.7
						1	3					1		5	470.0	623.9
	壮年	男女					1			1			2	4	500.0	679.1
				1	1	4	1	3	1	1		2	2	16	456.7	574.2
世帯年収	老年	男女		2				1					4	7	183.3	424.5
				1		1			1		1		7	11	400.0	401.3
	計	男女		2		1	1	1		1		1	8	15	478.6	547.7
				2	1	6	4	3	2	1	1	3	9	32	450.0	501.5

出身階層には、15歳時の暮らしぶりを使用する。これは中学校を卒業する頃の暮らしぶりを聞いたものであり、回答の内容を「豊か」「普通」「苦しかった」の3段階に分類した。なお、「裕福ではなかった」や「貧しいけれど（当時は）それが普通だった」などは「普通」に分類している。表2-4を見ると、男女ともに最も多いのは「普通」で、男性8人、女性16人とそれぞれおよそ半数である。次いで「苦しかった」が男性6人、女性15人と多く、「豊か」は男女とも壮年層に1人ずついるだけであった。青年層女性と壮年層男性では「苦しかった」が「普通」を上回っ

ている。

血筋についてもここで確認をしておこう¹⁾。両親がアイヌである者は男性で5人、女性で10人であった。また、父母のいずれかがアイヌである者は男性で8人、女性で15人である。アイヌの血は年とともに確実に薄まっており、老年層では両親アイヌが男性4人、女性5人と片親アイヌよりも多くなっているが、壮年層では男性が両親アイヌ1人に対して片親アイヌ2人、女性が両親アイヌ5人に対し片親アイヌ7人と逆転している。青年層にいたっては、全員が片親アイヌであった。

表2-4 15歳時の暮らしぶり 単位：人

		豊か	普通	苦しかった	計
青年	男性	0	3	1	4
	女性	0	2	3	5
壮年	男性	1	1	2	4
	女性	1	8	7	16
老年	男性	0	4	3	7
	女性	0	6	5	11
計	男性	1	8	6	15
	女性	1	16	15	32

表2-5 血筋 単位：人

		両親アイヌ	片親アイヌ	和人	計
青年	男性	0	4	0	4
	女性	0	5	0	5
壮年	男性	1	2	1	4
	女性	5	7	4	16
老年	男性	4	2	1	7
	女性	5	3	3	11
計	男性	5	8	2	15
	女性	10	15	7	32

注)「和人」は本人が和人の血筋で配偶者がアイヌである者。

出身階層と到達階層とを媒介する要因として、本人の学歴と結婚についても確認をしておく。

表2-6の最終学歴を見ると、男性では高等学校卒業が10人と最も多い。それ以外は中学校卒業が4人、高等専門学校卒業が1人である。大学へ進学した者は1人もいなかった。世代別に見てみると、青年層は全員が高等学校以上へ進学している。壮年層、老年層とも、中学校までの者がいるが、それでも高等学校進学者の方が多い。一方、女性の進学はかなり抑えられている。高校がほぼ全入になった世代である青年層でも、5人中2人は中学校卒業で働きに出ている。ただ、今回の調査で唯一の四年制大学卒業者は青年層女性であった。壮年層では中学校卒が5人、高等学校卒が11人と3分の2以上が高校進学を果たしている。しかし老年層では高等学校へ進学した者は1人しかおらず、9人は中学校まで、1人は小学校までであった。

結婚の状況についてまとめた表2-7を見ると、女性は全員が結婚経験者であることがわかる。それに対して男性は6人、結婚をしたことがない者がいる。離婚経験者は多く、男性では結婚を経験した9人中2人が、女性では32人中9人が離婚経験者であった。

表 2-6 最終学歴

単位：人

		小学校	中学校	高等学校	高専	大学	計
青年	男性			3	1		4
	女性		2	2		1	5
壮年	男性		1	3			4
	女性		5	11			16
老年	男性		3	4			7
	女性	1	9	1			11
計	男性		4	10	1		15
	女性	1	16	14		1	32

注) 1. 「中学校」は高等学校中退を含む。

2. 「高等学校」には、「旧制中学校卒業」1人(老年層男性)を含む。

表 2-7 結婚

単位：人

		既婚	離別	死別	未婚	計
青年	男性	2			2	4
	女性	3	2			5
壮年	男性	3			1	4
	女性	10	6			16
老年	男性	2	2		3	7
	女性	4	1	6		11
計	男性	7	2		6	15
	女性	17	9	6		32

注)「既婚」には離別経験者(再婚)を含んでいる。

第2節 男性の階層形成過程

本節では、青年層と壮年層の男性対象者の階層形成過程を検討する。なお、老年層は無職(定年後)が多く、収入についても年金のみという者が多いのでここでは検討対象から外している。

本調査では男性のサンプル数が少なく、また対象者それぞれの属性や背景がきわめて画一的であるという特徴がある。青年層、壮年層の8人のうち、6人は「片親アイヌ」であるし、同じく6人は高等学校卒業である。職業も、3人が漁業で3人は建設関係、残りの2人がフリーターと運輸である。高等教育進学者は1人しかおらず、職業ではホワイトカラーが1人もいない。

このようななか、個人年収を説明できそうなものの1つが結婚の有無である。未婚者3人の平均年収は183.3万円であるのに対し、既婚者5人の平均年収は530.0万円、1,050万円の1人を外れ値としても400.0万円である。年収100万円未満の2人はいずれも未婚者であった。

また、収入が400万円台の2人と600万円台、1,000万円台と比較的多い4人に注目すると、収入の多い4人は現在の職業キャリアが長いという共通点が浮かび上がる。現在の職業のキャリアは6～7年、15年、40年弱、30年である。また、6～7年という者も、10年勤めていた前職も同業であり、しかも自己都合の退職ではなく職場の倒産による転職であったため、キャリアとしては15年を超えている。それに対し、100万円未満の2人のうち、1人は高校卒業後フリーターをしており、もう1人は高校卒業後就職したものの、本人の性格によるものに不運なども重なり、職を転々とせざるをえなくなっている。なお収入が200万円台の2人は転職回数がともに1回であり、現職の勤続年数は4年、10年である。

男性においては出身家庭や血筋などの要素よりも、ひとつの職業に勤め続けることが到達階層の上昇に大きな影響を与えている。逆にいえば北海道、あるいは伊達市の不安定な雇用状況が、結婚の有無などとも関わって地位の上昇の阻害要因となっているといえるだろう。

第3節 女性の階層形成過程

女性についても青年層と壮年層のデータを使用して階層形成過程を探ってみよう。対象者の属性、背景が画一的であった男性データと異なり、女性データのそれはきわめて多様である。その一方で個人年収データは分散が小さく、最も高いものでも400万円台である。

女性の年収データを見ると、個人年収が高いからといって世帯年収が高いとは限らないという大きな特徴がある（表2－8）。血筋、15歳時の暮らしぶり、最終学歴、婚姻状況、就業状況のそれぞれについて個人年収の平均を算出したところ、最も平均年収が高いのは離別者の178.6万円であった。それに対して既婚者は88.5万円と半分以下の年収になっている。離別者の多くは自分自身で生活費を稼ぐ必要があるため、年収が高くなるのであろう。それぞれの世帯年収を見ると、離別者が400.0万円であるのに対し、既婚者は457.7万円と逆転している。結果として、離別者は本人のキャリアたる個人年収が高い一方で、事実上の生活レベルを規定しうる世帯年収は低くなっている。

血筋を見ると、個人年収が高いのは両親アイヌの150.0万円、世帯年収が高いのは片親アイヌの540.9万円である。和人（配偶者がアイヌの血筋）は個人年収75.0万円、世帯年収250.0万円と、ともに3つのカテゴリーの中で最も低い。

15歳時の暮らしぶりでは、「貧しかった」という者の個人年収が150.0万円で最も高く、世帯年収は「普通」が480.0万円で最も高い。

最終学歴で比較してみると、高校を卒業した者の平均個人年収が146.2万円と中学校卒の75.0万円を大幅に上回っている。だが、やはりここでも世帯年収は中学校卒の方が高い。なお、女性には大学卒業者が1人いるが、特定を避けるため以下で最終学歴を扱う際には分析から除外している。

就業状況については、個人年収が有職者150.0万円に対して無職者50.0万円、世帯年収も有職者500.0万円に対し無職者270.0万円と、ともに有職者の方が高くなっている。無職者はすべて専業主婦というわけではなく、怪我や病気による休職中の者や失業し次の仕事を探している者も含まれている。いずれにせよ、決して世帯年収でゆとりがあるので専業主婦になれているという単純な構図ではないことがわかる。なお、無職の者でも個人年収の平均が0でないのは、仕事をやめるまでの収入などを答えた者がいるためである。

表2－8 平均個人年収と世帯年収 単位：人、万円

		N	平均個人年収	平均世帯年収
血筋	片親アイヌ	12	125.0	540.9
	両親アイヌ	5	150.0	350.0
	和人	4	75.0	250.0
15歳時	豊かだった	1	50.0	250.0
	普通	10	100.0	480.0
	貧しかった	10	150.0	412.5
最終学歴	中学校卒	7	75.0	550.0
	高校卒	13	146.2	411.1
婚姻	既婚	13	88.5	457.7
	離別	8	178.6	400.0
就業状況	有職	15	150.0	500.0
	無職	6	50.0	270.0

女性の階層形成の道筋をスタートから追っていこう。表2－9は、生まれ（血筋）→15歳時の暮らしぶり→最終学歴と成長を追う中で、どのように階層分化が進んでいったかを示す試みである。たとえば血筋が片親アイヌだった者は11人おり、そのうち6人は15歳時での暮らしぶりが苦しく、5人は普通であった。そして、片親アイヌで15歳の時生活が苦しかった者のうち、3人が中学卒業で就職し、3人が高校を卒業した、といったように見ていくことができる。

表2－9を見ると、まず血筋だけに注目すれば、片親アイヌよりも両親アイヌの方が現在の個人年収は高く、世帯年収は低いということがわかる。15歳時の暮らしぶりに目を移すと、片親アイヌでは苦しかった者が6人、普通だった者が5人とほぼ半々であるのに対し、両親アイヌでは普通だった者1人に対し苦しかった者が4人となっている。さらに、和人では普通が3人、豊かが1人であり、苦しかった者はいなかった。アイヌの血が濃いほど、15歳時点における暮らしぶりが苦しいものとなっていることがわかる。

さらに最終学歴まで進んでみると、15歳時の生活の苦しさは、そのまま高校進学に大きな影響を与えていることがわかる。15歳時の生活が苦しかった者は、血筋が片親アイヌでも両親アイヌでも、半数が中学校卒業までであり、高校卒業に至ったのは半数だけであった。和人は15歳時の暮らしぶりにかかわらず全員が高校を卒業している。

では、アイヌの女性たちにとって、学歴は階層の上昇移動を引き起こすのだろうか。表2－8でも確認したように、高校を卒業した者は個人年収が146.2万円と、中学卒業者の75.0万円よりも高い。しかし、世帯年収で比較すると、高卒者は411.1万円で中卒者の550.0万円よりも低くなっている。このことを深く検討するため、表2－10では、婚姻状況と最終学歴の関係をまとめた。これを見てもやはり、既婚者の場合は中学校卒業の者の方が高校卒業よりも、個人年収は低いが世帯年収は高いという関係があることがわかる。ただし、離別者の場合は、若干ではあるものの高卒者の方が世帯年収も高くなっている。

これらより、高校を卒業することにより個人年収は上昇すること、そしてそれは血筋や15歳時の暮らしぶりといった出身階層の影響をも打ち破るものであることがわかった。だが、これは生活水準をより直接的に規定する世帯年収をも改善するものではないようだ。世帯年収を上げるものは、女性の学歴よりも同居家族のあり方により強く規定される。

表2－9 血筋×15歳時の暮らしぶり×最終学歴

血筋	15歳時の暮らしぶり	最終学歴
片親アイヌ (11 : 131.8 : 570.0)	苦しかった (6 : 150.0 : 490.0)	中学校卒業 (3 : 83.3 : 700.0)
		高校卒業 (3 : 216.7 : 350.0)
	普通 (5 : 110.0 : 650.0)	中学校卒業 (1 : なし : 350.0)
		高校卒業 (4 : 137.5 : 725.0)
両親アイヌ (5 : 150.0 : 350.0)	苦しかった (4 : 150.0 : 283.3)	中学校卒業 (2 : 50.0 : 450.0)
		高校卒業 (2 : 200.0 : 200.0)
	普通 (1 : 150.0 : 550.0)	中学校卒業 (1 : 150.0 : 550.0)
		高校卒業 (3 : 83.3 : 250.0)
和人 (4 : 75.0 : 250.0)	普通 (3 : 83.3 : 250.0)	高校卒業 (3 : 83.3 : 250.0)
	豊か (1 : 50.0 : 250.0)	高校卒業 (1 : 50.0 : 250.0)

注) 1. () 内は左から順に「人数」「平均個人年収(万円)」「平均世帯年収(万円)」
2. 「大学卒業」の1人は特定を避けるため表から排除している。

表 2-10 婚姻状況×最終学歴

単位：万円

		中学校卒業	高等学校卒業	計
個人	既婚	62.5	106.3	91.7
	離別	100.0	210.0	178.6
	計	75.0	146.2	123.7
世帯	既婚	600.0	412.5	475.0
	離別	350.0	410.0	400.0
	計	550.0	411.5	450.0

注)「大学卒業」を除いているため、表 2-8 と一致しない。

第 4 節 まとめ

以上の検討により得られた知見を最後にまとめておこう。第 1 節では 3 つの検討課題を設定した。まず、階層形成に対する学歴の影響については、男性においてはほとんど観測できなかった。これは、検討した対象者のほとんどが同じ学歴を有しているという制約によるものである。ただ、学校卒業後の就職、転職の経緯を見ると、おそらくは学歴よりも職業生活の方の影響が強いことがうかがえる。男性で高い収入を得ている者はいずれも同じ職業を長く続けている。転職が貧困リスクとなりうることを考えても、伊達調査においては学歴よりも雇用の安定の方が重要であると考える。

女性においては、高等学校への進学は個人の年収を引き上げることが示された。これは、現時点で配偶者がいる者と離別者とをわけて検討しても見出せる特徴であった。

女性の階層形成については、これまでの調査分析によって、結婚があまりに重要でありそれ以外の要素の影響力をほとんどなくしてしまっていることが示されていた。だが、伊達調査においては配偶者というよりも、親やきょうだい、あるいは子どもなどを含む同居家族の影響力が非常に強かった。個人年収にははっきりとした影響を与える学歴も、世帯年収にはほとんど影響を与えていない。また、離別者であっても、自分ひとりで家計を支えているという者はほとんどいなかった。

また、アイヌの血筋については、両親ともにアイヌである者の方が、親の片方のみがアイヌである者よりも 15 歳時の暮らしぶりが厳しく、また高校卒業も難しいという特徴が見られた。しかし、学校を経由して現在の収入を見ると、個人のレベルでは血筋の差は解消している。世帯年収にはまだ差が見られるものの、アイヌの血筋による差は、本人の経歴によって覆すことが可能なものであるようだ。

以上、伊達市に住むアイヌの人々の階層形成過程を見てきた。そこには、札幌やむかわ、新ひだかで見られたものとは異なる階層形成のあり方が見出された。これには、家庭によってはきわめて高い収入をあげることもある漁業の存在や、配偶者以外の同居家族による支援といった伊達市、あるいはアイヌの人々が多く住む有珠地区の特徴が原因になるのだろう。

ただ、ここまで見てきたように、伊達市アイヌ調査はいくつかのデータの制約があった。ひとつは男性データの不足である。とくに現役世代のデータが少なく、また画一的であるため十分な分析ができたとはいいがたい状態である。これは、今後他地域のデータとの比較や市民調査との比較によって克服すべき課題といえる。

一方で女性のデータは豊富であったため、踏み込んだ検討を行うことができた。しかし、それ

でもいくつかの制約があった。とくに重要なのは、未婚者のデータがないことと、高等教育進学者のデータが少ないことである。これもまた、他地域との比較を通じてより深めていく必要があるだろう。

注

- 1) 壮年層において、母親がアイヌの養子で父親がアイヌの血筋である者をここでは「両親アイヌ」に分類している。また、老年層において母親がアイヌの血筋で父親が不明という者を、少なくとも一方がアイヌと解釈し、ここでは「片親アイヌ」に分類している。

参考文献

- 野崎剛毅, 2012, 「階層形成過程と階層分化の要因」 小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 95-108.
- , 2013, 「アイヌ民族の階層形成」 小内透編著『調査と社会理論・研究報告書30 新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 30-7.

(野崎 剛毅)